

（２）寺院

市全体で 34 寺院あり、浄土真宗が 30 寺院、禅宗 4（黄檗宗 3、曹洞宗 1）寺院の内訳となっています。

如法寺（山内）は、求菩提山護国寺の末寺で元は天台宗でしたが、延宝 7 年（1679）に広寿山二世法雲により開山され、黄檗宗となりました。

本願寺の蓮如上人の時代、浄圓寺は明応 5 年（1496）に浄土真宗となりました。

八屋の賢明寺の山門は千束藩陣屋の旭城の城門を移築したものです。

宇島にある教円寺の鐘楼は創建二重三層に袴腰で、二層目は正面三間側面二間で大屋根が張り出しており、市内の寺院建築でも特徴があるものです。

指定文化財に関連する寺院は以下の通りで、2 寺院 8 件となっています。

寺院名	所在地	関連する指定文化財
如法寺	山内	木造金剛力士立像、如法寺の石塔群、如意輪観音像、如法寺の扁額及び即非画像、別府一九郎寄進絵図、如法寺「写経水」（如法寺境内は史跡求菩提山如法寺地区）
浄圓寺	松江	浄圓寺絹本阿弥陀来迎図



如法寺本堂（山内）



如法寺不動院（山内）



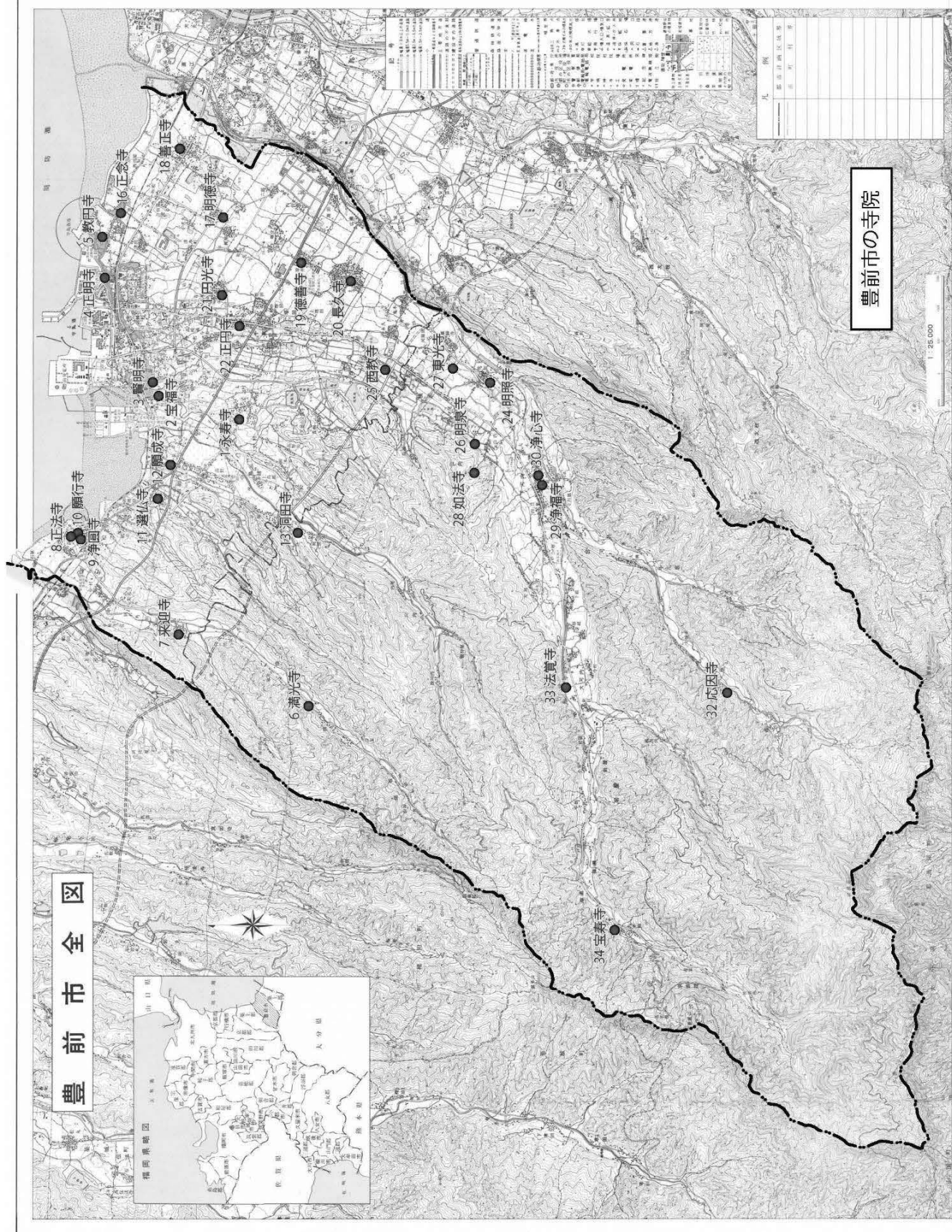
浄圓寺（松江）



教円寺（宇島）

表 豊前市内の寺院一覧

		名称	山号	宗派	本尊	所在地
八屋地区	1	永寿寺	矢倉山	真宗木辺派	阿弥陀如来	大字大村1482番地
	2	宝福寺	東光山	黄檗宗	薬師如来	大字八屋745番地
	3	賢明寺	紫金山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字八屋1347番地
	4	正明寺	智光山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字赤熊843番地
	5	教円寺	宝林山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字宇島481番地
角田地区	6	満光寺	常喜山	真宗大谷派	阿弥陀如来	大字畑1546番地
	7	来迎寺	平照山	真宗大谷派	阿弥陀如来	大字馬場837番地
	8	正法寺	宝樹山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字松江285番地
	9	浄円寺	湯越山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字松江404番地
	10	願行寺	護法山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字松江403番地
山田地区	11	選仏寺	明覚山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字四郎丸1327番地
	12	願成寺	猪倉山	真宗木辺派	阿弥陀如来	大字四郎丸633番地
	13	洞田寺	瑠璃光山	曹洞宗	薬師如来	大字川内2614番地
	14	西楽寺	常住山	真宗木辺派	阿弥陀如来	大字川内2540番地
	15	鳥越説教所	-	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字鳥越317の1番地
三毛門地区	16	正念寺	清涼山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字沓川489番地
	17	明德寺	獅伏山(紫福山)	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字三毛門805番地
	18	善正寺	梅高山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字市丸205番地
黒土地区	19	徳善寺	明光山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字岸井334番地
	20	長久寺	大井山	真宗大谷派	阿弥陀如来	大字久路土828番地
千束地区	21	円光寺	法性山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字吉木690番地
	22	正円寺	宝林山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字千束229番地
	23	松濤庵	-	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字千束299の3番地
横武地区	24	明照寺	松林山	真宗大谷派	阿弥陀如来	大字狭間589番地
	25	西教寺	白雲山	真宗大谷派	阿弥陀如来	大字大西287番地
	26	明泉寺	林河山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字山内699番地
	27	東光寺	薬師山	黄檗宗	阿弥陀如来	大字薬師寺381番地
	28	如法寺	常在山	黄檗宗	如意輪觀世音菩薩	大字山内991番地
合河地区	29	浄福寺	長谷山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字下河内1844番地
	30	浄心寺	慈弘山	真宗木辺派	阿弥陀如来	大字下河内1609番地
	31	慶雲寺	萱切山	真宗木辺派	阿弥陀如来	大字下河内1843番地
	32	応因寺	永誓山	真宗大谷派	阿弥陀如来	大字上川底854の2番地
岩屋地区	33	法覚寺	巖石山	真宗大谷派	阿弥陀如来	大字大河内718番地
	34	宝寿寺	放光山	浄土真宗本願寺派	阿弥陀如来	大字鳥井畑660番地



(3) 石造美術

豊前市史によると、石造美術としてあげられているのは、層塔 3 基、宝塔 4 基、宝篋印塔 4 基、五輪塔 4 基、板碑 8 基、単独石仏 8 基の他に八十八か所仏・諸仏・妙見菩薩の石仏、石灯籠 3 基、鳥居 9 基、狛犬 8 基、墓塔圭頭墓 6 基、墓塔斗栱墓 19 基、自然石碑・磨崖碑・角柱碑（笠付・圭頭）・石祠など 45 基、標類 7 基、石橋 1 橋となっています。

求菩提山が修験道場であったことからも宝塔に関する石造物が多く見られます。



国玉神社（求菩提山）の五重塔と宝篋印塔



求菩提山の宝塔



石清水八幡宮（久路土）の鳥居と灯籠



大山祇神社（鳥井畑）の鳥居



山内集落内の石碑



清原御旅所（下河内）の石柱

種 類	名 称	所在地
層塔	不動窟の三重塔	岩屋地区(求菩提山)
層塔	岩洞窟の三重塔	岩屋地区(岩洞窟)
層塔	求菩提山の五重塔	岩屋地区(求菩提山 国玉神社)
宝塔	求菩提山の宝塔	岩屋地区(求菩提山 鬼神社)
宝塔	岩洞窟の宝塔	岩屋地区岩屋 (岩洞窟)
宝塔	夫婦木の宝塔	合河地区夫婦木
宝塔	地藏堂の宝塔	岩屋地区岩屋 (地藏堂)
宝篋印塔	求菩提山の宝篋印塔三基	岩屋地区求菩提山
宝篋印塔	(1) 山の神塔	岩屋地区(求菩提山 広沢宮司宅裏山)
宝篋印塔	(2) 国玉神社左の塔	岩屋地区(求菩提山 国玉神社)
宝篋印塔	(3) 日吉神社前の塔	岩屋地区(日吉神社)
宝篋印塔	道祖神社の宝篋印塔	横武地区才尾(道祖神社)
五輪塔	如法寺の五輪塔	横武地区(如法寺)
五輪塔	大理石製の五輪塔	
五輪塔	一石五輪塔	角田地区馬場 永寿寺墓地 八屋地区宝福寺の南 崎山墓地 横武地区山内 如法寺 など
五輪塔	積上式五輪塔	角田地区原井 猛勇神社近く
板碑	挟間の板碑	横武地区(千手観音堂)
板碑	原井の両面板碑二基	角田地区
板碑	丸山家墓地の両面板碑	角田地区
板碑	猛勇神社の両面板碑	角田地区(猛勇神社)
板碑	天和の板碑	合河地区(合八幡神社前の田の畔)
板碑	求菩提山の角塔婆	岩屋地区(求菩提山)(合河地区大稗の小堂内)
板碑	六郎公民館前の板碑	三毛門地区(六郎公民館前)
板碑	常行堂の自然石板碑	岩屋地区(求菩提山中宮社務所東側常行堂跡)
板碑	雁股山の板碑	合河地区(雁股山)
単独石仏	松本家具製作所の地藏	宇島地区西神明(長洲の坂の下)(松本家具製作所)
単独石仏	宝福寺の地藏	八屋地区前川(宝福寺)
単独石仏	安浄寺跡の地藏	岩屋地区求菩提山(安浄寺跡)
単独石仏	たたき地藏	岩屋地区求菩提山
単独石仏	求菩提山の六地藏塔	岩屋地区求菩提山(求菩提山尾根の墓地入口)
単独石仏	丸山墓地の聖観音	千束地区上千束(丸山墓地)
単独石仏	ヤネンドーの十一面観音	合河地区立岩(屋根ノ堂(ヤネンドー))
単独石仏	求菩提山登山口の十三仏	岩屋地区求菩提山(一の鳥居から登山道100m程)
単独石仏	求菩提山の八十八ヶ所仏	岩屋地区求菩提山(求菩提山登山道)
単独石仏	岩洞窟の諸仏	岩屋地区岩屋
単独石仏	岩洞窟の妙見菩薩	岩屋地区岩屋
石燈籠	大富神社の燈籠	四郎丸地区(大富神社)
石燈籠	嘯吹八幡神社の燈籠	横武地区(嘯吹八幡神社)
石燈籠	求菩提山の燈籠	岩屋地区(求菩提山)
明神鳥居	賀茂春日神社の鳥居	三毛門地区久松(賀茂春日神社)
明神鳥居	石清水八幡神社の肥前系鳥居	黒土地区久路土(石清水八幡神社)
明神鳥居	道祖神社の鳥居	横武地区才尾(道祖神社)
明神鳥居	国玉神社の鳥居	岩屋地区(求菩提山 国玉神社)
明神鳥居	沓川神社の明神鳥居	三毛門地区沓川(沓川神社)
明神鳥居	七社神社の鳥居	岩屋地区中畑(七社神社)
明神鳥居	大山祇神社の明神鳥居	岩屋地区鳥井畑(大山祇神社)
神明鳥居	大富神社の神明鳥居	山田地区四郎丸(大富神社)
狛犬	須佐神社の狛犬	山田地区下鳥越(須佐神社)
狛犬	角田八幡神社の狛犬	角田地区中村(角田八幡神社)
狛犬	菅原神社の狛犬	八屋地区前川(菅原神社)

種 類	名 称	所在地
狛犬	大富神社の狛犬	山田地区四郎丸(大富神社)
狛犬	春日神社の狛犬	三毛門地区三毛門(春日神社)
狛犬	四公神社の狛犬	八屋地区明神(四公神社)
狛犬	貴船神社の狛犬	合河地区立岩(貴船神社)
神使	厳島神社の鹿	八屋地区明神(厳島神社)
圭頭墓	—	山田地区 中田
圭頭墓	—	合河地区 合岩中学校裏山
圭頭墓	—	角田地区 馬場の永寿寺墓地
圭頭墓	—	宇島地区 戸津田
圭頭墓	—	角田地区 馬場の永寿寺墓地
圭頭墓	—	山田地区 鳥越の湯吹山、清原家墓地
斗栱墓	—	横武地区永久 大蔵家墓地 三基
斗栱墓	—	横武地区 挟間観音橋手前(挟間集会所裏) 左側墓地四基
斗栱墓	—	横武地区挟間 楠本家墓地 二基
斗栱墓	—	角田地区松江鶴迫 浄円寺住職墓地
斗栱墓	—	八屋地区大村横谷 佐藤家墓地
斗栱墓	—	横武地区永久 大蔵家墓地
斗栱墓	—	横武地区挟間 楠本家墓地
斗栱墓	—	合河地区大河内 東の山麓
斗栱墓	—	黒土地区岸井 徳善寺住職墓地
斗栱墓	—	角田地区原井 安部家の墓塔 四基
自然石碑(紀名あり)	—	求菩提山 不動院跡
自然石碑(紀名あり)	—	求菩提山 愛宕社横
自然石碑(紀名あり)	—	求菩提山 獅子の口
磨崖碑(紀名あり)	—	求菩提山 阿弥陀窟右
自然石碑(紀名あり)	—	求菩提山 朝日窟入口
角柱(紀名あり)	—	求菩提山 中宮の右
磨崖碑(紀名あり)	—	求菩提山 阿弥陀窟
石祠(紀名あり)	—	求菩提山 中宮右
磨崖碑(紀名あり)	—	求菩提山 阿弥陀窟
圭頭角柱碑(紀名あり)	—	求菩提山 下谷入口
自然石碑(紀名あり)	—	求菩提山 阿弥陀窟
笠付角柱碑(紀名あり)	—	角田地区 平寿寺
庚申塔(紀名あり)	—	求菩提山 鬼石坊跡手前、主道路脇右
笠付角柱碑(紀名あり)	—	求菩提山 豊照神社
角柱碑(紀名あり)	—	三毛門地区 出家
自然石碑(紀名あり)	—	横武地区 大西神社
庚申塔(紀名あり)	—	山田地区 四郎丸、荻田、貴船神社
自然石碑(紀名あり)	—	八屋地区 本町、大林家墓地
自然石碑(紀名あり)	—	八屋地区 前川、宝福寺
自然石碑(紀名あり)	—	求菩提山 豊照神社左
自然石碑(紀名あり)	—	八屋地区 二葉、丸尾墓地
角柱碑(紀名あり)	—	岩屋地区 篠瀬 バス停横
自然石碑(紀名あり)	—	宇島地区 昭和町 長厳寺山墓地
自然石碑(紀名あり)	—	角田地区 松江 地藏堂
自然石碑(紀名あり)	—	山田地区 梶屋 洞田寺
角柱碑(紀名あり)	—	八屋地区 教校 三本松墓地
笠付角柱碑(紀名あり)	—	千束地区 上千束 丸山墓地
笠付角柱碑(紀名あり)	—	八屋地区 大村 横谷 友枝家墓地
自然石碑(紀名あり)	—	八屋地区 前川 菅原神社

種 類	名 称	所在地
自然石碑(紀名あり)	—	角田地区 松江 日本山妙法寺
自然石碑(紀名あり)	—	横武地区 上大西 生田一枝氏宅前
庚申文字塔(紀名あり)	—	求菩提山 杉谷入口
庚申文字塔	—	求菩提山 北谷出口
庚申文字塔	—	求菩提山 座主坊入口かみの主道路わき左
庚申文字塔	—	岩屋地区 篠瀬バス停
庚申文字塔	—	黒土地区 石清水八幡神社
猿田彦文字塔	—	山田地区 四郎丸今町 蛭子神社
猿田彦文字塔	—	山田地区 荻田 貴船神社
猿田彦文学塔	—	山田地区 大富神社
猿田彦文字塔	—	山田地区 櫛狩屋 二の渡
猿田彦文字塔	—	横武地区 山内集落 旧道添い
猿田彦文字塔	—	合河地区 大河内集落 旧道添い
猿田彦文字塔	—	宇島地区 沓川一本松の四叉路
猿田彦文字塔	—	三毛門地区 春日神社前
道祖神文字塔	—	山田地区 下鳥越集落内
標類(郡界標)	上毛・築上の郡界石	松江地区
標類(領界標)	藩界石	黒土地区 久路土
標類(領界標)	藩界石	黒土地区 高田
標類(道標)	求菩提道道標	八屋地区 前川・上町・下町・本町の四つ角
標類(道標)	—	求菩提山 旧登山口
標類(道標)	—	求菩提山 安浄寺跡前
標類(郡界標・領界標・道標)	—	求菩提山 愛宕社北 峰尾
石橋	大阪屋橋	八屋地区前川 (現在はフレスポに遺構は移動)

(4) 古文書

中世文書	
津野田文書	天正7年～天正14年
末久文書	建保5年～天正10年
友枝（内尾）文書	永正12年～享祿5年
唐原天満宮文書	元弘3年～享和2年
西郷文書	延文5年～永祿12年
大富神社文書	
大蔵澄子文書	文明1年
角田則行文書	明応6年～天文3年

求菩提山文書	
大内氏関係文書	
大友氏関係文書	
求菩提山法度	
臼杵氏関係文書	
豊臣秀吉制札	
黒田氏関係文書	
細川氏関係文書	
長岡氏関係文書	
宗門帳	
御請状	
御神米銀取配当控帳	
松会祭礼役指帳	
御納米二五石割帳	
補任状	



大富神社文書

近世文書	
○支配	
御案内覚帳	延享3年
上毛郡役心得書上巻、上毛郡地利益書下巻	文化3年
上毛郡井樋鑑	文化10年
御案内の者心得方申合候書付	天保9年
御条目写	天保8年
法度書	明治2年
公文録 版籍奉還の部	明治2年
公文録 千束藩の部	明治2～4年
勸農並心得書	明治3年
○長州征討戦	
海岸共外締方手配帳	慶応2年
御家中従類上毛郡え入込人数控	慶応2年
御家中従類控帳	慶応3年
上毛郡両手永村々農兵名前書上帳	慶応3年
○村	
（上毛郡村々明細帳）	寛政7年
上毛郡両手永村々庄屋名前帳	文化元年
豊前国上毛郡の内郷村高帳	天保5年
豊前国内道路及び郡内地付戸籍控帳	天保9年
上毛郡大庄屋格以上名前書上帳	文久3年
覚（村方公簿引継文書）	未8月
上毛郡村々預山書上帳	明治5年
○戸口	
上毛郡男女人別御改惣寄帳	安政5年
六郷村名竈数其外調子帳	慶応2年
○貢組	
上毛御勘定三組寄帳	寛文2年
簗嶋・椎田・八屋・宇嶋川口運上取立御法帳	慶応4年
（郷中算法論）	年代不詳
○産業・商業	
上毛郡村々酒造稼の者名前書上帳	慶応3年
上毛郡村々職業並商売仕候者書上帳	慶応3年
上毛郡八屋村諸商人御免札受書上帳	慶応4年
上毛郡村々諸物産書上町	明治2年
御届申上候覚（漁網返却に際し争論のこと）	2月10日
○宗教	
指上ケ申宗旨替証文の事	元禄7年
指上申宗門月改の事	宝暦9年
指上申宗門証文の事	明和2年
就宗門御改諸証文控	嘉永3年
○総記	
万屋文書	天保9年～明治3年
（小倉新田藩郡役・倉橋源兵衛日記）	天保10年
天保13寅ヨリ御用方日記帳	天保13年～弘化元年

(5) 民俗芸能・祭礼

①豊前神楽

＜保存団体：岩屋神楽講・山内神楽講・黒土神楽講・三毛門神楽講・大村神楽講・中村神楽保存会＞

豊前の神楽の起源は、山伏により演じられる宗教儀礼として成立していたと考えられますが、文献などでその内容が確認できるのは江戸時代以降です。「大富神社文書」などによれば、祈雨祈晴、疫病退散などの祈願に神楽が奉納された記録が多数残されています。

豊前市内では現在 6 つの保存団体により伝承されています。岩屋神楽講(七社神社)、山内神楽講(嘯吹八幡神社)、黒土神楽講(石清水八幡神社)、三毛門神楽講(春日神社)、大村神楽講(大富神社)、中村神楽保存会(角田八幡神社)で「豊前神楽」として旧豊前国の 33 の神楽団体とともに国の重要無形民俗文化財に指定されています。毎年 9 月から 12 月の間、市内 50 ヶ所余りの神社等で氏子の求めに応じて奉納されています。

豊前神楽の特徴は、駄仙(御先)という象徴的な鬼が奥の演目でその主役を務め、まさに「鬼神楽」と称してもよいところにあります。

一方で湯立神楽には修験道的要素の強い内容も見ることができ、豊前修験道の「松会」行事の影響を強く受けた内容は、他の地域では見られない豊前神楽独特の演目として評価されています。

表 神楽講と奉納神社

神楽講名	奉納神社等
岩屋神楽講	七社神社 日吉神社 大山祇神社(鳥井畑) 稲成神社 大山祇神社(夫婦木) 大山祇神社(枝川内) 産家集会所 沓川神社 大山祇神社(篠瀬) 大山祇神社(青畑)
山内神楽講	嘯吹八幡神社 道祖神社 日吉神社 貴船神社(下川底) 貴船神社(中川底) 貴船神社(立岩) 清原神社 貴船神社(松尾川内) 貴船神社(挾間) 楡八幡宮 大西神社 宗像神社 深山八幡神社 須佐神社 貴船神社(永久) 合八幡神社 大山祇神社(青畑)
黒土神楽講	石清水八幡神社 乙女八幡神社 貴船神社(小石原) 堂山神社 初河瀬神社 沓川神社
三毛門神楽講	春日神社 貴船神社(恒富) 貴船神社(三楽) 貴船神社(市丸)
大村神楽講	大富神社 厳島神社 貴船神社(東吉木) 清水神社 水神社 貴船神社(轟) 千束八幡神社 足切神社 菅原神社 恵比寿神社 貴船神社(田淵) 沓川神社 甲神社 事代主神社 大歳神社 琴牧神社 大山祇神社(青畑)
中村神楽保存会	角田八幡神社 水神社 角田公民館





岩屋神楽講



山内神楽講



黒土神楽講



三毛門神楽講



大村神楽講



中村神楽保存会

②豊前感応楽（山田の感応楽）

＜保存団体：豊前感応楽保存会＞

大富神社は春の「神幸祭」、夏の「夏越祭」、秋の「御供揃祭」と3つの大祭があり、中でも最も規模の大きいものが春季神幸祭で、その際隔年で奉納されるのが「山田の感応楽」です。感応楽は天地感応楽、又は国楽とも呼ばれています。もともとは6月30日、7月1日の夏越祭で行われていましたが、明治10年（1877）頃から春の神幸祭にあわせて4月30日と5月1日に行われるようになりました。その目的は



大富神社春季神幸祭

五穀豊穰、雨乞い、天下泰平、国家長久の祈願であり、人事を尽くして及ばざる最後の手段として神の前に一念を捧げその年の豊作を祈願したといえます。

感応楽は大富神社のほか、住吉御旅所、四郎丸地区にある大富神社の末社(10ヶ所)で楽打が奉納されます。その内容は祭文の奏上に始まり、第1楽から第19楽まできわめて複雑な所作で構成されています。この感応楽を奉納するのは四郎丸地区の前の谷と迫の谷と呼ばれる地区の氏子で、中楽(6人)、団扇使い(2人)と呼ばれる楽人を中心に大団扇(2人)、囃子方(笛12人、鉦4人)、水取り(2人)、読み立て(2人)、そして子どもが演じる側楽(花楽)です。祭り当日は大富神社でのお立ちの楽打に始まり、最後はお着きの楽が同じく大富神社で奉納されます。大振の締太鼓を胸前に抱え、6人の中楽が激しい動きで演じる様は圧巻で、単調な所作が多い近隣の楽打の中にあって、出色の内容を持っています。

県無形民俗文化財に指定されているとともに、文化庁により記録作成等の措置を講ずべき無形の文化財に選択されています。

③豊前楽（角田八幡神社の豊前楽）

＜保存団体：中村区文化財保存会＞

豊前楽は、角田八幡神社に伝わる楽打で、祭文によればその起源貞観6年(864)とされています。もともとは毎年春の神幸祭(5月19・20日)に奉納されていましたが、今は5月の第3土・日に隔年で奉納されています。神幸行列は、角田、松江の氏子が担い、太刀(2人)、鉦(2人)、旗、傘鉦(2台)、神輿で構成されます。かつては角田、松江、西角田の三地区で盛大に執り行われ、楽打ちの他に二基の山車(西町七社神社、恵比須神社)3台の神輿(馬場、畠中、西角田)2台の傘鉦(中村)が参加していました。



豊前楽

山車は昭和50年(1975)頃を最後に中断していましたが、平成24年(2012)に興祇会(地元の青年団)を中心に再興されました。

行列は角田八幡神社を出発し、馬場、中村、畠中を巡行して、西廻の年は松江の七社神社に、東廻の年は恵比須神社を御旅所として一泊し、翌日には再び角田八幡神社へ帰るルートを通ります。

豊前楽は囃子方6人(大太鼓、小太鼓、大鉦、小鉦、笛)、踊り方20人程度、読み立て1人、介添人1人で構成され、陣形は直線的に2列に並び、それぞれの列が対峙して交差しながら陣形を変えてゆきます。舞いは、田遊びの内容を表現しているといわれ、太鼓は小振りの締太鼓が用いられ、比較的ゆっくりとしたテンポで、笛、鉦と絶妙な音色を醸し出します。

④求菩提山のお田植祭（求菩提山松会）

＜保存団体：求菩提山お田植祭保存会＞

求菩提山国玉神社中宮前の広場にて、毎年3月29日(現在は3月30日以降とならない最終

日曜日)に行われる松会は、豊作を予め祝う祭りで、少なくとも鎌倉時代前期から伝承されていると考えられており、現在では「田行事」のみが伝えられています。県無形民俗文化財に指定されています。

「松会」はもともと求菩提山や英彦山をはじめとする旧豊前地方の修験道寺院で行われた神仏習合の祭ですが、現在求菩提山では国玉神社の神事として「神幸祭」と「田行事」のみが伝えられ、「幣切り行事」は戦後途絶えたままです。

祭りは国玉神社中宮前の広場で、春の種まきから秋の採り入れまでの農作業を真似ての所作が神歌にあわせてユーモラスに繰り広げられます。祭はまず午前中に神幸祭として御神輿が御旅所に向かう御くだりが行われ、そのあとに松庭で神楽の奉納（岩屋神楽講）が行われます。午後、国玉神社中宮前の広場（松庭）に「^{やりまき}道巻」と呼ばれる神歌が流れるなか、いよいよ「お田植祭」の始まりです。米作りにかかるお百姓の農作業がユーモラスに演じられてゆきます。



求菩提山のお田植祭

- ①畦切り 菅傘を被った白装束の男が畦草を刈る様子を演じます。すると草の中から蜂が出てきて、慌ててそれを追い払う様子が観衆の笑いを誘います。
- ②田打ち 花笠を被った稚児が登場し、二人ずつが歩み出て木製の鋤と棒を叩き合わせて田打ち（鋤で耕す）の所作を真似します。
- ③畦塗り 鋤を担いで現われた白装束の四人の男たちが、大きな動作で畦を塗って行きます。
- ④田鋤き のっしのっしと張子の牛が登場し、田を鋤いて行きます。懸命に手綱を操る牛使いをあざ笑うように反対方向進んだり、寝転んだりとなかなか言うことを聞きません。そのユーモラスな掛け合いがこの祭の最大の見せ場です。
- ⑤種子蒔き ようやく田ごしらえが終り、菅笠に白装束の男が静かに種を蒔き始めます。御神歌が流れる中、その年の豊作を願うように四方に種を蒔いてゆきます。
- ⑥田植え ここで花笠に赤や青の袴をはいた稚児が登場し、田植え歌に合わせて田植えの所作をします。その所作は形式的なものですが、かわいい子どもたちの単純な動きがかえってほほえましく映ります。本来は^{そうとめ}早処女による所作であったかと思われれますが、今は単に子ども達がその役を担っています。
- ⑦孕み女 女装をした孕み女（身持ち女）と、うない（初花乙女）が大きな鉢にてんこもりのご飯を抱え、柄鏡と櫛で御髪を整えながらユーモラスに松庭を廻ります。「孕み女・うない」は生命の誕生を豊作に擬えたもので、穂ばらみを期待する所作といえます。



田植え

- ⑧田誉め 最後に傘をさした神官を先頭に演者全員が「ほーう、ほーう」の掛け声とともに松庭を廻ります。この時、演じる者、観る者とが一体となって大合唱となり、祭を締めます。こうした所作は近隣の他の田行事には見られず、求菩提山で特徴的な所作といえます。こうした所作を演ずる人たちは松役と呼ばれ、かつては修験者（山伏）がこれを行なっていましたが、現在は麓の岩屋地区の保存会の人たちが祭を支えています。最後に神楽が一番舞われ、駄仙鬼を先頭にお神輿が御旅所から本殿に向かう御のぼりが行われ、祭は終了します。



田誉め

⑤清原神事

「嘯吹八幡神社縁起書」（年代不詳）によれば、祭は寛平2年（890）に始まると記されています。はじめは11月（霜月、初卯日）に行なわれていましたが、明治以降に4月の行事となり、現在は4月の第2土・日曜日に執り行われます。中世には宇都宮氏、近世には小笠原氏の関与が知られ、祭神は神功皇后（八幡神、竹内宿禰）、応神天皇、仲哀天皇で、それぞれの神輿で御旅所まで巡行します。



第1日目は、まず朝早く八尋ヶ浜^{じがん}で次官が塩汲みをします。午前9時から山内の神輿が住城の大山祇神社に巡行し（3年に一度）午後2時頃には神社に戻ります。午後3時から三基の神輿と傘鉾を中心とした神幸行列が御旅所である清原神事場を目指します。行列の構成は次官（塩筒）、高幣（たかべい）、鉾面（鬼面の赤、青）、幣台（お上りは子ども会）を先頭に傘鉾・神輿、傘鉾・神輿、傘鉾・神輿、の順に続き氏子はそれぞれ山内、大木・為国・中組、四ツ口・合原の組み合わせで傘鉾と神輿を担ぎます。神輿の順番は山内だけが決まっています、お上りは二番目、お下りは一番目とされ、他はその年で違うようです。以前はこの後に神馬役・神官車が続いていました。また、高幣がそれぞれの神輿と傘鉾を受け持つことになります。途中の須佐神社でお神輿を鎮め、午後8時頃には清原神事場に到着し、入り口の二塚神社（猿田彦命、天鈿女命）で祭典を行った後、神事場に入ります。最後に神輿を浮殿に収納した後にお着きの神楽が舞われ、初日の行事が終了します。以前は宇佐神宮から刀を携えた54人の警護役が派遣されてきたといいま



清原神事

すが、今は次官が御旅所に泊まって守護しています。

第2日目は午後1時から山内神楽講によりお立ちの湯立神楽が奉納され、同じルートでお下りが行なわれます。午後8時頃には嘯吹八幡神社に戻り、神殿に神輿を納め全ての行事が終了します。拝殿では遅くまで神楽が奉納され、祭神の帰還を祝います。巡行の途中では決められた場所でそれぞれの神輿が高く天に掲げられ、また、氏子によって激しく回転させて雄姿を競います。



湯立神楽

⑥大富神社春季神幸祭（八屋祇園）

＜保存団体：八屋祇園連絡協議会＞

大富神社春の大祭である「神幸祭」の起源は縁起によると、天平12年（740）の「藤原広嗣の乱」に際し、その鎮圧に功績のあった上毛郡の擬大領、紀宇麻呂の凱旋の様子を模したものとされます。この神幸祭は江戸時代までは名越祭と同時に旧暦6月29日に行われていましたが、明治初年に名越祭と分離して4月30日、5月1日に行われるようになりました。県無形民俗文化財に指定されています。

祭の前日（4月29日）には大富神社では茅輪設置や、神輿の準備などが行われます。八屋の町では4月初めから始められた祇園の準備がクライマックスを迎え、踊り車は午前中には汐かきを済ませ午後からは各町内を廻り始めます。船車は午後には町内を出発し、御旅所で汐かきをした後に提灯で飾り付けを行います。一方の山鉾も午後3時頃には御旅所で汐かきを行なった後、夕方にかけて前川橋附近で提灯の飾り付けを行います。そして船車と山鉾は上町の四辻で行き交い、幻想的な提灯山となって観衆を魅了します。ここでは船車が四辻を明神方向に曲がるまでは山鉾は通過することが出来ず、昔はその通過を巡っていさかいがおこる事もあったと言います。さらに、山鉾も上町が通るまで本町は通ることは出来ません。その上町の山鉾が狭い四辻を片方の脚を跳ね上げて90度廻す操作はスリル満点で、見事としか言いようのない技です。



大富神社春季神幸祭

1日目（4月30日）の午後には、神前で幣を立てた船形（船御輿）のまわりに一文字笠、紋

服、白扇姿の唄衆が蹲居(そんきょ)し、船歌を唱和することから始まります。次いで感応楽の奉納(隔年で、神楽と交互に奉納)がすむと、笛衆・笠鉦・船形・神輿三台・神職が乗った神馬の順で、八屋の八尋浜の御神幸場(旅所)まで巡幸(御くだり)します。途中、上町の三叉路で船車(明神、住吉が一年交代)が行列をお迎えし、これに従うように各町内の踊り車(下町、八幡町、前川)や山鉦(本町、上町)がそれぞれに御旅所を目指します。また、上町の四辻では行列、船車、踊り車、山鉦の通過する順番が決まっていて、昔ながらのしきたりが守られています。おそらく江戸時代の八屋の町で、中心となる辻だったと考えられます。また、本町の宇都宮家では行列の通過後に古井戸から汲んだ水を当主が桶に入れて担いで御旅所へと向います。この水は翌日のお田植神事で使われますが、その謂れははっきりとしません。さて、先に御旅所についた行列は氏子達によって神輿の練り込みが行なわれ、順番に浮殿に納められます。お着きの神事後、舟歌組による「四季の口説」が奉納され、再び「感応楽」の奉納で初日を終えます。そして、夕刻になるとまず船車が、次いで山鉦(午前中に飾り山に衣替え)が、さらに宵闇迫る頃には踊り車が次々と御旅所に到着し、祭はクライマックスを迎えます。山車が一気に広場へ入る様は勇壮で、祭りの醍醐味を感じさせます。

2日目(5月1日)は午前中に神事が行なわれた後、昼頃には踊り車が前川、下町、八幡町の順に出発します。午後2時から盛砂にチガヤの束を18本植えて水をかけるお田植神事があり、次いで茅の輪を奉仕者がくぐりぬける「茅の輪くぐり」が行われます。午後3時半には神幸行列が御旅所を出発し、お上りとは別の広山を経由して大富神社を目指します。続いて午後2時半には船車が出発し、前川まで神幸行列を送った後町内へ向います。さらに5時半頃に上町、本町の山鉦が相次いで出発します。一方、感応楽はこの日は早朝から四郎丸の各神社で奉納を行い、神幸行列が大富神社に着く夕方7時頃をめどに神社でお着きの奉納を行います。大富神社に着いたお神輿は、各町内の氏子によって境内で練り込みが行なわれた後、御神殿に納められ祭りは終了します。

その頃、八屋の町ではまだ祇園車の巡行が行なわれていて、特に踊り車は新天街の三叉路で競演会を行い宇島駅まで巡行した後に各町内へと帰ってゆきます。



大富神社春季神幸祭

⑦宇島祇園(宇島神社春季神幸祭)

<保存団体：宇島祇園保存会>

宇島祇園の始まりは、宇島港築港中の文政8年(1825)に小倉藩主小笠原忠固公が、海路江戸表へ参勤交代の途中、工事の進捗状況の確認に訪れた折に大時化に遭い、あわや遭難というところを宇島より亀町、蓬莱町の漁民が漁船で漕ぎ出し無事宇島港まで曳航したことに忠固公が感激したことに由来するとされ、翌文政9年(1826)より殿様祭りとして祇園祭を執り行うよう

になりました。

祭りは神輿に先導され、船を乗せた「天祥丸」という山車を先頭に本宮から御旅所まで各町内の神社で船歌を奏唱しながら進みます。船歌は世話人が音頭をとり上の句を、子供は下の句を歌い、鉦と太鼓による「コンコンチキリン」の囃子に乗って威勢よく大綱で引き廻します。踊り車は昭和40年代までは子供歌舞伎でしたが、現在では歌謡曲による舞踊となっています。



宇島祇園

祭りの初日は花（ご祝儀）貰いといって、各町内から6台の山車（天祥丸、八千代町、千代町、恵比須町、魚町、神明元町）が出て地区内を練りまわし、商家や有志の家に立ち寄り踊り等を奉納しながら宇島神社に集結します。翌4日（中日）は、祭典の後、各山車が注連で踊り等を奉納しながら小笠原神社で休憩。最後は御旅所である堂山神社に入ります。5日（終日）は堂山神社（八千代町）を午後にお立ちとなり、神輿を先頭に町内を巡行した山車が宇島神社を前に一気に駆け込み、祭りはクライマックスを迎えます。舟歌が奉納され、踊りの競演と続き、最後に天祥丸の引き上げ音頭によって山車は町内に向かって引き上げ、祭りは終わります。

市無形民俗文化財に指定されています。

⑧厳島神社百手祭（厳島神社 八屋）

豊前のあちこちに鬼にまつわる伝説がありますが、厳島神社には「股手の藪」と呼ばれる小藪があり、そこには悪事を働いて人々を困らせた鬼の股と手とが埋められていると言い伝えられています。

百手祭では、しめ縄の張られたその小藪に神霊が宿るというヒモロギを立て、さらに藪の中ほどに「鬼」と墨書した的をかけ、それに向けて三度弓を引き矢を射ます。第一の矢は的の上一尺を、第二の矢は的の下一尺を、第三の矢は重ねた二枚の的を射抜きます。これを悪魔を払う「墓目の法（ひきめのほう）」と呼びます。墓目（引目）とは木製のやじりのことで、数個の穴があって、これを射るとき空気がその穴に触れて一種の音を発することにより、魔物を追い払うとされます。



百手祭（墓目の法）

なお、前年の祭の座で、翌年の当番を籤引きで定め、「当前（とうまえ）」と呼ばれる籤で当たった7人が、百手祭の一切を受け持って、奉仕する決まりです。

かつては、祭りの作法や出される食事の内容など、厳格に事細かく執り行われていましたが、今では簡略化されています。

⑨山人（やまと）走り （山内・下河内）

嘯吹八幡神社で行われる祭りで、次官による神事として伝承されているものです。山内と下河内それぞれ12人の次官がいましたが、今は5人ずつに減っています。山人は当屋と呼ばれ、毎年当番で次官が勤めます。

前日、山内の当屋は櫛を根から引き抜いてきて夜神前に供え、各次官の家に挨拶に廻ります。

当日の早朝には山内の次官が八尋の浜にお汐井取りに行き、岩岳川（永久）の宮ノ下にある畑の大根3本を抜き、その跡に御幣を立て岩岳川で大根を洗って帰ります。黒酒、白酒（甘酒と清酒で代用）、大根3本、汐筒、幣付きの櫛2本を神前に供えます。

午前10時に羽織袴の次官が集まり祭典（シバ座）を行った後、鳥居の見える場所に斎場を設け、神饌を移します。そして、2人の当屋は白装束に白足袋、草鞋履きで、注連縄を腰に巻きそこに鉈を差して口には櫛の葉をくわえ準備が整います。

午前11時、斎場で宮司の持つ櫛の下部を握った次官はその瞬間カミとなり、掛け声とともに宮司が櫛を離すとそのまま走り出します。鳥居をくぐり県道を横切り山内集落を抜けて「歳越えの坂」にある「七ツ石」を並んで走りながら目指します。

「七ツ石」では向かって右端の石に山内の山人、左の端には下河内の山人が正座して心の中で祝詞を唱えます。そしてそれぞれ次の年の当屋の家に向かって走り始めます。その工程2～3km程。到着した山人は草履のまま座敷に上がり、来年の当屋からお神酒を大杯で三杯頂いたところで人に戻るとされます。下河内では腰の鉈を渡すと「頭渡し」といいます。また、座敷にはコモを敷くことから「コモン座」と呼び、午前中には終わります。

山内は正午頃来年の当屋の家で宮司、次官が集まり直会を、下河内は午後2時頃から同じく直会を行い、終了となります。



山人（やまと）走り

⑩山人（やもど）走り （大河内）

大河内の日吉神社には「山人（やもど・やまんど）走り」という儀礼が伝えられています。

大河内の日吉神社に祀られている神様は、求菩提山を守るため京都からはるばるとお迎えした神様だといわれています。この神様は京都の日吉神社から海路、瀬戸内海を通り、杵川の浦に着いてそこから岩岳川に沿って岩屋に着いたといわれています。そして法覚寺の裏山にある「おとんごぜ」という場所に落ち着いたといわれています。これを知った村長は夜が明ける前に数人の村人を連れてお迎えに向かいますが、その時村人の一人が打ち振る「ヒイトギ」で明かりを取りながら村長の家まで案内したといひます。途中、夜も明けたので「ヒイトギ」を道路わきの土中に突き刺していったところ、不思議



山人（やもど）走り

なことに数日してその「ヒイトギ」の木から柿の芽が出だしたそうです。一方、神社を建てるまで村長の家の座敷を仮御殿として過ごされる神様のもとには村人が代わる代わる酒やご飯を差し上げたそうです。「ヒイトギ」から芽吹いた柿木は以来、日吉神社のご神木として大切にされ、今は何代目か分かりませんが根元はこげているといいます。「ヒイトギ」は松明の代わりに使われた明り取りで、燃え残りの薪の先に残る火のことです。

祭りは10月初申(はつさる)日の午後に執り行われます。当日、神社に次官6人(以前は12人)と山人1人、それに宮司が午後2時に集まり、前日の夜に作った粥を入れた桶二つを神前に供えます。次官の1が御供殿でお盆の形をした器(白木)に赤飯、桑、ご神木から取った小さい柿の実を三つ乗せ、これを八つ(次官と宮司の分)整え、甘酒一桶、清酒一升を備えて控えます。

次官は口に柿の葉をくわえ、御供殿から神殿へ並び手送りで献饌、玉串奉奠を行います。

山人は山仕事の姿(荒縄を腰に巻き、鉈を差す)で御幣の付いた柿の枝を持って、神殿裏で待機します。本殿左の疫神社で祭典が始まり、修祓のあと山人が「ユードウ」という声を出し、このときからカミガカリとなります。

直ちに山人は境内南側の鳥居を走り出て旧道を通り200mほど先のご神木(柿木)へと向います。目指す場所は時代によって変わってきました。大正時代までは元宮といわれる「おとんごぜ」(旧岩屋小学校の裏山の祠)まで、昭和初期からは「神の柿」を継ぐ若木があり、山人の走る距離は短縮されましたが、元宮の神に祈りをささげる山人の役割に変わりはありません。「神の柿」に着くとそこで荒縄を解き、この縄で持ってきた柿をご神木に縛り付けた後、神社へ帰りカミから人へ戻るといいます。

疫神社祭典終了後、本殿から拝殿へ撤饌を行い、拝殿での直会で終了します。なお、山人の役は次官が輪番で務める慣わしです。

⑪畑のどんど焼き

<保存団体：畑どんど焼保存会>

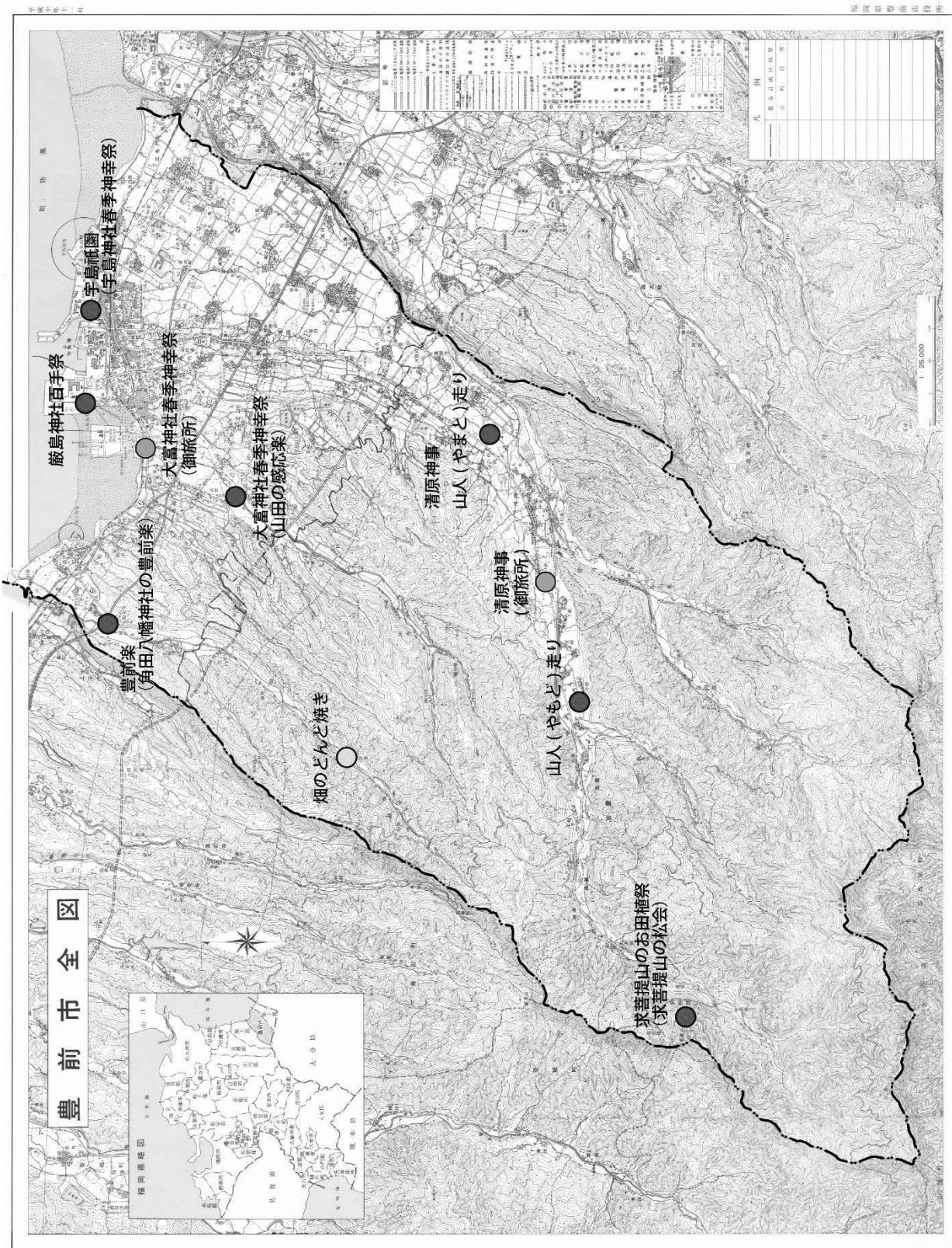
日本では旧暦の1月15日を小正月といって、特別な日として意識してきました。正月の行事は主に火の儀礼であることはよく知られていますが、九州ではより古い習慣形態として農山村の火祭りとしてドンドが受け継がれてきたと考えられています。

豊前市を含む近郷ではかつてこのドンド焼きが盛んに行われていましたが、豊前市畑地区では特徴的な形態として行われています。一般的にこの地域のどんど焼きは竹の柱を芯にして松や杉を束ね搭のように積み上げますが、畑地区ではお籠り小屋と

いう竹と藁で出来た建物を作り一週間程度この小屋で宴をしながら地域の人たちが交流をします。その間、お札や注連飾り等を建物の壁に飾りつけ、最後に無病息災、家内安全などを祈り、小屋に火が放たれます。勢いよく燃える火が周囲を照らし竹の弾ける音が谷あいには響きわたり、まさに火祭りと呼ぶにふさわしい勇壮な祭りです。



畑のどんど焼き



【主な祭礼位置図】

(6) 伝承・民話

豊前市史に記載された伝承は27件あり、自然に関するものが3件、神功皇后に関するものが7件、和氣清麻呂に関するものが3件、城に関するものが4件、信仰に関するものが4件となっています。市域の平野部から山間部まで各地の伝承が見られます。

豊前市史掲載の伝承

NO.	名称	種類	位置	概要
1	久松の夜泣き松	自然伝説	三毛門地区 久松 (観音堂)	観音堂にある二本の老松の葉で夜泣きの子供の体をさすってやると夜泣きはなおするという。(二本の老松は数年前に枯死)
2	天神様の石	自然伝説	岩屋地区 鳥井畑 (放光山宝寿寺(以前は宝寿庵))	宝寿庵寺の住職が、カガトに挟まった石を天神様の化生であろうと裏山の岩窟に祠を作り祀った。
3	行逢宮と大楠	自然伝説	黒土地区 鬼木 (貴船神社(別名:行逢宮))	景行天皇が九州平定のためはじめて土蜘蛛の軍と戦った場所で、大楠の下で勝ちどきをあげた。後年この地に貴船神社を祀り行逢宮と名付けた。この社地跡にある楠の大木の木瘤は鬼の面がついているようである。
	鬼木の楠			犬ヶ岳に棲む鬼が逃げ出す途中、鬼木の楠の木に顔をブチつけて死んでしまい、それ以来この楠の木に木瘤が出来るようになった。
4	お腰掛	神功皇后巡幸伝説	角田地区 豊前松江駅東南	神功皇后が豊前路を巡幸した際、休憩された巨石がある。
5	湯越の由来	神功皇后巡幸伝説	山田地区	神功皇后は温泉に入浴して旅の疲れを癒すため通った峠を、湯越えと名付けた。
6	舟石	神功皇后巡幸伝説	山田地区 川内谷 (大富神社の奥の院といわれる神領地)	神功皇后は山田郷の温泉を探す時、この山に登り巨石を発見し、舟石と名付けた。
7	大村の由来	神功皇后巡幸伝説	山田地区 鳥越からキイト峠	神功皇后は、キイト峠から東の方を見下ろす村を、たくさんの民家が点在することから大村と名付けた。
8	馬洗池の話	神功皇后巡幸伝説	千束地区 野田	神功皇后はこの淵を気に入り、軍勢を止め馬のひづめを洗って休息したという。この淵を馬洗淵と呼ぶようになり、後年大きな池を築造した際に馬洗池と名付けた。
9	吉木の由来	神功皇后巡幸伝説	千束地区 吉木	神功皇后が船材を各地に求めた際に、吉木原の楠が良い木であることから良木と名付けた。それが吉木に変わっていった。
10	才尾の由来	神功皇后巡幸伝説	横武地区 才尾	神功皇后は水浴した清水の流れをさやの川と名付けた。それが訛って才尾の地名になった。
11	拝み松	和氣清麻呂にまつわる伝説	山田地区 伏拝野(四郎丸)	和氣清麻呂が大富神社を拝し皇室の安泰を祈願した場所(伏拝野)。その記念に植えられた松の木一本を拝み松と名付けた。
12	岸井の霊水	和氣清麻呂にまつわる伝説	黒土地区 岸井	岸井区の氏神恵美須神が鎮座していた跡地には今もきれいな清水が湧いており、岸井の地名にもなっている。
13	清水町の足洗池	和氣清麻呂にまつわる伝説	三毛門地区 清水	和氣清麻呂が足の病を癒したという。清水が出ることから清水村という。
14	山田城哀話	城にまつわる伝説	山田地区	戦国時代、新たな領主となった黒田氏と、土豪たち一揆との戦い。
15	馬場城の落城	城にまつわる伝説	角田地区 馬場	宇都宮氏の一族蜂谷氏代々の居城。
16	雁股城落城	城にまつわる伝説	合河地区 雁股山	南北朝時代は畠山氏の一族、その後は宇都宮氏の抱城。
17	鬼の石段	鬼にまつわる伝説	岩屋地区 求菩提山 中宮～上宮	昔、犬ヶ岳に住んでいた鬼が築いた850段の石段がある。
18	乳の観音	信仰伝説	横武地区 挟間 泉水寺の観音堂	観音堂の左右から出ている水をもらいその水で粥を炊いて食べると乳が出る、という言い伝えがある。
19	弘法様の井堰	信仰伝説	黒土地区 久路土 新生橋下の井堰	弘法大師が食のお礼に錫杖で堰の中をつつくとき地中から水が噴き出し、その後どんな大旱魃があっても井堰の水は枯れることがない。
20	嘯吹八幡宮の赤鬼面と如法寺の焼不動	信仰伝説	横武地区	大友宗麟の大軍は、掲げられた鬼面から炎が噴き出した事に驚き、嘯吹八幡宮を焼き払うのを断念したという。如法寺の本尊は大友軍に焼かれたが、不動堂を造り安置すると山内地区に火事が起こらないようになった。

NO.	名称	種類	位置	概要
21	人柱伝説	信仰伝説	千束地区 荒堀 池尾池	池尾池の堤防が決壊し、村の娘お倉を人柱にして堅牢な堤防が完成した。
22	「おとんごぜ」と柿の木	信仰伝説	岩屋地区 大河内 おとんごぜ、日吉神社	神様を迎え案内した時の明かりに用いたヒイトギの木から、柿の木が芽吹いた。その後日吉神社の神木となっている。
23	火の浦の由来	その他の伝説	岩屋地区 篠瀬 戸府	高野山と求菩提山双方の火が消え、お互いに火をもらいに行った使者が出会った場所で、天から火種が降ってきて双方の松明に火が付いた。
24	お秋伝説	その他の伝説	岩屋地区 求菩提 秋霧台	求菩提の登山口附近を秋霧台と言い、春先になると深い霧で覆われる。ここで非業の最後を遂げたお秋の怨霊のせいだといわれている。
25	足無川	その他の伝説	八屋地区 足無川(馬場川)	一揆の首謀者清兵衛は、命乞いの条件の馬場川を渡って向こう岸に渡る事ができず打ち首になった。その後この川を足萎川、訛って足無川となった。
26	大伝寺坂の哀話	その他の伝説	山田地区 大伝寺坂(広山から千束に抜ける上往還)	冬の木枯らしの吹く晩には大伝寺坂の近くから、子供を残して田んぼの中で息を引き取った女の悲しい呼び声が聞こえるという。
27	河童の伝説	その他の伝説	岩屋地区 大河内 長淵、八屋地区 前川 城根川など	河童は少々いたずら好きで、人間と相撲を取ったり、淵に人や馬を引きこんで肝をとったりするという。

『豊弼求菩提山修験文化攷』に記載された伝説 35 のうち、その内容でみると、人間や動物に関するもの 15 (鬼は 4、人は 4、タヌキは 3、など) であり、川や淵など水に関するもの 5、岩・石に関するもの 4 となっています (重複含む)。

その場所をみると、岩岳川の中流の大河内から源流をなす犬ヶ岳の間に、すべて存在しています。その内訳は、篠瀬 6、求菩提 6、大河内 5、産家 4、鳥井畑 4、宮ノ谷 3、他、となっていて、特に篠瀬から求菩提にかけて集中しています。

また、鬼に関する現存する伝承地は 11 あり、そのうち 7 は岩屋から求菩提に所在しています。

求菩提山調査の伝承

NO.	名称	位置	備考
1	鬼の石段	求菩提山 中宮～上宮	八屋峰尾、椎田峰尾に、鬼が逃げる時に捨てたという鬼石がある。
2	割れ石	大河内 法覚寺の裏山頂上	鬼が投げ落とした石ということで、鬼の手形といわれる跡が残っている。割れ石近くに清水が湧き出る井戸があると言われていた。
3	長淵(ながぶち)	大河内 下組から法覚寺の裏(長さ 1 キロくらい)	鬼が一晩で掘ったという伝説の淵。
4	籠り水	求菩提山 普賢窟	求菩提山普賢窟前に籠り水(こもりみず)のお社が建っている。
5	鬼石坊(おにいしばう)	求菩提山 鬼石坊の石垣	鬼神の靈験で怪力を得た鬼石坊という山伏が積み上げたと伝えられる石垣。
6	天満宮の御神体 (成長石)	鳥井畑 宝寿寺境内	昔、住職の履物に挟まった石を持ち帰ったところ、少しずつ大きくなる不思議な石だった。
7	念仏岩	鳥井畑 宝寿寺境内	宝寿寺が天台宗から浄土真宗に転宗する時、今の本堂の位置にあった岩に向かって念仏を唱えると、大岩は横に動き、お寺を建てるために場所を譲ったという。
8	ト仙、定(じよう)に入る	宮ノ谷 ト仙地	鳥井畑と宮本の境に宮ノ谷がある。ト仙が即身成仏したと伝えられる場所で、小便などをすると罰が当たるなどと言われている。
9	片目の亀	犬ヶ岳の蛇ヶ淵	築上郡越路の片目の亀をつれてきて蛇ヶ淵につけると、雨が降ると言われている。
10	小谷の由来	岩屋町 小谷	夢のお告げに誘い出された求菩提の山伏と、尻高の覚円寺(上毛郡)の住職とが出会ったという場所。昔は逢谷(おうたに)と書いていた。
11	萩川(はらいがわ)	産家(さんげ) 宮本	お産のために麓の産小屋で過ごしていた山伏の妻が山内に帰る時、身を清めたため川の名前が萩川と呼ばれるようになったと言われる。
12	お谷淵	産家 宮本	産家の宮本の横を流れる川に、お谷淵という深いところがある。昔この淵に身を投げたお谷さんが水底に引っ張りこむので、子供は近づくなと言われていた。
13	オコヤン淵	篠瀬 岡本製材所の下手	篠瀬の岡本製材所の下手に谷川があり、直径が約三メートルくらいの丸い淵になっている。昔、オコヤンと呼ばれる老婆が身を投げたので、オコヤン淵と言われるようになったという。

NO.	名称	位置	備考
14	ごうのむけ	鳥井畑 宮本	宮本部落の裏手に石を積み立て、その中央に大きな石を立てたものがあって、それをごう様といっている。そのごう様の向かいがごうのむけと言われるようになったと言う。
15	火の浦	篠瀬 戸府(とぶ)の県道横	法灯を絶やさぬように、分けた火を運ぶ途中、同じ役目の他山からの使者と求菩提の使者が出会った場所という。
16	ト仙(ぼくせん)	鳥井畑	鳥井畑の大山祇神社の下を流れる用水路と小谷が交るあたりにト仙という所がある。
17	玄冲塚	築上郡築上町寒田(さわだ)	乳呑み坂を登りつめた尾根に玄冲塚を建てて非業の死を遂げた玄冲の零を吊っている。
18	乳呑み坂	築上町寒田～求菩提の途中	途中に休憩箇所のない長い急坂のため、背負った赤子が空腹で泣くが休むことができず、登り切るまでがまんをさせたところ、途中で眠ったと思っていた赤子がすでに事切れていた。
19	山姫	犬ヶ岳	山にはいった男の生き血を吸うと信じられていた。
20	川姫	大河内 長淵	岩岳川の長淵で男が美しい女に手招きされ川に引きずりこまれる。
21	カワツツノ	宮ノ谷 ト仙地	鳥井畑と宮本の境に宮ノ谷がある。河童の地域での異名と思われる。
22	キンショキ	篠瀬 古屋敷	古屋敷部落の下の方の、しょうどん坂の下手に橋がかかっていた。いわゆるアズキトギの異名と思われる。
23	なべだんのキツネ	篠瀬 戸府 火の浦	なべだん(なべ谷)というのは戸府(とぶ)部落と篠瀬部落との間にあって、うっそうと茂った森があり、ここを通りかかった者がキツネによく化かされたと伝えられる。
24	長淵のキツネと火の玉	大河内 長淵	長淵の近くで火の玉を目撃し驚いていると、キツネに化かされていたと言う。
25	宮谷のタヌキ	宮ノ谷	鳥井畑と宮本の境に宮ノ谷がある。ここを通りかかるとタヌキからいたずらをされたと言う。
26	産家のタヌキ	求菩提 産家	いたずらタヌキがでたと言われる。
27	弓取のタヌキ	大河内 新貝 弓取	いたずらタヌキがでたと言われる。
28	猫化け	篠瀬	化け猫がでたと言われる。
29	アケクレ	犬ヶ岳	山中で夜明けがきたと思ったら、アケクレにだまされ、まだ夜中だったと言う。
30	宮本の火の玉	産家 宮本	夜火の玉を見たらしい。
31	ほとけ迎え	求菩提	お盆の十三日の夜、墓場に先祖を迎えにいくと、背中が重くなる。そして家に帰り仏壇までいくと、背の重みが消えたと言う。
32	不動門の神鏡	産家	産家の奥の竜門の山の中に不動門というところがある。岩をくり抜いて通り抜けるようになっているが、その奥に深い洞窟があった。ここはかつて古い鏡がかかっていた。
33	秋の霧	求菩提 秋霧	求菩提の下八丁坂の下の方に秋霧という地名がある。秋になると霧が発ちこめることがよくあるが、そこは昔ここで斬り殺されたお秋が招きよせる霧だと言う。
34	山姥	篠瀬	人喰いの山姥が出たと言う。
35	ウサラカヒコクボ	求菩提、他	ウサは宇佐八幡、ラカは耶馬溪の羅漢寺、ヒコは英彦山、クボは求菩提。閻魔様の裁きを受ける時、この4社寺に生前参っていれば、極楽行き、行っていなければ地獄行きと告げられると言われていた。

(7) 遺跡

市内には260件を超える多くの遺跡が確認され、遺跡分布図と遺跡一覧にまとめています。そのうち史跡指定されたものは国指定の求菩提山と県指定黒部古墳群、蔵春園(恒遠塾跡)、市指定黒峰尾古墳群、平原横穴墓群です。現在も増えています。

また、中世から戦国時代の城館跡も山城を中心に37か所が確認されています。

遺跡番号	遺跡の名称	種別	時代
1	中村城ヶ鼻遺跡	城館跡?	中世
2	鳥越城跡	城館跡	中世
3	七社大明神	神社	近世
4	浄円寺	寺院	中世
5	松江安延遺跡	散布地	古代
6	宇佐勅使街道	官道	古代
7	松江旧街並	旧街並	近世・近代
8	角田八幡神社	神社	中世
9	團後遺跡	散布地	古代
10	中村石丸遺跡	集落跡	古代
11	中村団後遺跡	集落跡	古代・中世
12	角田大庄屋敷跡	屋敷跡	近世
13	中村石丸H遺跡	散布地	中世
14	中村山柿遺跡	散布地	古代
15	則行城跡	城館跡	中世
16	永寿寺跡	寺院跡	中世
17	馬場城跡	城館跡	中世
18	鶉迫第1号古墳	古墳(円墳)	古代
19	鶉迫第2号古墳	古墳(円墳)	古代
20	鶉迫遺跡	散布地	古代・中世
21	灰ノ木古墳	古墳(円墳)	古代
22	黒部古墳群	古墳(県指定)	古代
22-1	黒部2号墳	古墳(方墳)	古代
22-2	黒部3号墳	古墳(円墳)	古代
22-3	黒部6号墳	古墳(円墳)	古代
23	黒峰尾古墳群	古墳(市指定)	古代
23-1	黒峰尾10号墳	古墳(円墳)	古代
24	炭山遺跡	散布地・砦?	中世・近世
25	松江炭山遺跡	集落跡	古代
26	黒峰尾遺跡	散布地	古代
27	四郎丸船入遺跡	散布地	中世
28	築上郡上毛郡界標柱	標類	近世
29	四郎丸小脇遺跡	散布地	古代
30	四郎丸広山ノ上遺跡	散布地	古代
31	住吉(塞)神社	神社	中世
32	宝福寺	寺院	中世
33	八屋城跡	城館跡	中世
34	八屋漁港旧防波堤	港湾堤防	近代
35	豊州鉄道(現日豊線)橋脚	橋脚	近代
36	八屋旧街並	旧街並	近世・近代
37	大阪屋橋	石橋	近代
38	八屋樋ノ口遺跡	散布地	中世
39	八屋鈴川遺跡	散布地	古代・中世・近世・近代
40	八屋浦町遺跡	散布地	中世
41	八屋高水寺遺跡	散布地	古代・中世・近世・近代
42	八屋丸尾遺跡	散布地	中世
43	八屋向原山際遺跡	散布地	古代・中世
44	今市向野遺跡A・B地点	集落跡	古代・中世・近世
44-2	今市向野遺跡D地点(1・2区)	集落跡	古代・中世

遺跡番号	遺跡の名称	種別	時代
44-3	今市向野遺跡E地点	集落跡	古代・中世
45	宇島鉄道軌道敷(宇島駅)	鉄道	近代
46	宇島港旧防波堤	港湾堤防	近代
47	宇島旧街並	旧街並	近世・近代
48	吉木遺跡	集落跡	古代・中世
49	吉木常末遺跡	集落跡	古代・中世
50	下原遺跡	集落跡	古代・近代
51	吉木城跡(小森城)	城館跡	中世
52	吉木穴井遺跡	散布地	中世
53	昭和町遺跡	墓地?	古代
54	池田神社	神社	近世
55	赤熊城跡	城館跡	中世
56	赤熊遺跡	散布地	古代・中世
57	赤熊井ノ坪遺跡	集落跡	古代・中世
58	赤熊三反田遺跡	集落跡	古代・中世
59	赤熊花ノ木遺跡	集落跡	中世
60	清水町神増遺跡	散布地	古代・中世・近世
61	三毛門・黒土条里跡	条里跡	古代
62	沓川城跡	城館跡(条里跡)	(古代)・中世
63	恒富西ノ畑遺跡	散布地	古代
64	小犬丸曲掛遺跡	条里跡?	古代
65	三毛門遺跡	散布地	古代・中世
66	三毛門放生田遺跡	集落跡	古代・中世
67	開立寺遺跡	散布地	古代
68	恒富小村遺跡	散布地	古代・中世
69	御境川(界川)藩境	標類	近世
70	原井経塚①	経塚	中世
71	原井経塚②	経塚	中世
72	不動明王像及び脇侍二童子と窟	仏像・祭祀(市指定)	中世
73	竹ノ下観音堂跡	仏像・祭祀	
74	竹ノ下の窟	祭祀跡	
75	雲見神社	神社	
76	毘沙門遺跡	集落跡	古代・中世
77	大富神社	神社(県指定あり)	中世
78	平原横穴墓群	横穴墓(市指定)	古代
79	川内南原遺跡	集落跡	古代・中世
80	四郎丸原畑遺跡	集落跡	中世
81	川内楠木遺跡	集落跡	古代
82	平原城跡	城館跡	中世
83	四郎丸窯跡	窯跡	古代
84	荒堀雨久保遺跡	集落跡城館跡?	古代・近世
85	筆垣城跡	城館跡	中世
86	安祥寺城跡	城館跡	中世
87	八屋覆矢遺跡	散布地	古代・中世
88	炊江郷	集落跡	古代
89	大村城跡	城館跡	中世
90	天地山遺跡(石棺出土地)	墓地	古代
91	荒堀大保遺跡	集落跡	古代・中世
91-2	荒堀大保Ⅱ遺跡	集落跡	古代・中世
92	荒堀車地遺跡	集落跡城館跡	古代
93	荒堀中ノ原遺跡	集落跡	古代
94	荒堀城跡	城館跡	中世
95	荒堀向上遺跡	散布地	古代・近世
96	荒堀向原遺跡	散布地	古代・近世・近代
97	今市城跡	城館跡	中世
98	今市向野遺跡C地点	集落跡	古代
99	大村道場遺跡	集落跡墓地	中世・近世
100	大村石畑遺跡	集落跡城館跡	古代・中世

遺跡番号	遺跡の名称	種別	時代
101	大村天神林遺跡	城館跡	古代・中世?
101-2	大村天神林遺跡(2区)	集落跡城館跡	古代・中世
102	大伝寺跡・城屋敷遺跡	寺社跡城館跡?	中世
103	友枝庄屋敷遺跡	屋敷跡	近世
104	四郎丸角ノ木遺跡	集落跡?	古代
105	千束藩家老屋敷跡	屋敷跡	近代
106	千塚原古墳群	古墳群	古代
107	吉木竿遺跡	集落跡	中世
108	吉木ウシロ遺跡	散布地	古代
109	吉木井溝遺跡	散布地	古代・中世・近世
110	吉木芦町遺跡	集落跡	古代
111	千束駅(宇島鉄道)	鉄道	近代
112	塔田駅(宇島鉄道)	鉄道	近代
113	市丸城跡	城館跡	中世
114	市丸城居屋敷遺跡	集落跡	中世・近世・近代
115	市丸門田遺跡	散布地	中世
116	梶屋西屋敷遺跡	散布地	中世
117	梶屋法師丸遺跡	散布地	中世
118	梶屋樋掛遺跡	散布地	中世
119	梶屋正ノ元遺跡	散布地	中世
120	掘立島元遺跡	散布地	中世
121	別府遺跡	集落跡墓地	古代・中世
122	六郎城跡	城館跡	中世
123	六郎神田遺跡	集落跡	古代・中世
124	掘立白坊遺跡	散布地	古代
125	掘立八反田遺跡	集落跡	古代
126	森久中ノ坪遺跡	散布地	中世
127	森久サンジ遺跡	散布地	中世
128	六郎堂ノ前遺跡	集落跡	古代
129	六郎中小森遺跡	散布地	古代・中世
130	六郎熊本遺跡	散布地	古代
131	三楽諸町遺跡	散布地	中世
132	三毛門小村遺跡	散布地	古代・中世・近世
133	三毛門溝添遺跡	散布地	古代・中世
134	三毛門金吉遺跡	散布地	古代・中世
135	三毛門世畑遺跡	散布地	古代
136	三毛門大森遺跡	散布地	古代
137	三毛門城跡	城館跡	中世
138	洞田寺	寺院	中世
139 AB	鳥越今井野遺跡(A・B区)	集落跡	中世
140	白山神社と慈眼寺跡	神社寺院跡	中世・近世
141	高野の観音堂	仏像・祭祀	
142	山田城跡(八ツ田城跡)	城館跡	中世
143	荒堀石棺出土地	墓地	古代
144	上塔田遺跡	散布地	古代
145	西ノ原遺跡	散布地	古代
146	大西遺跡	集落跡	古代
147	中大西遺跡	集落跡	古代
148	東風ノ原遺跡	散布地	古代
149	中島遺跡	散布地	古代
150	青畑向原遺跡	集落跡	古代・中世
151	青畑城跡	城館跡	中世
152	荒堀火葬墓	墓地	古代
153	大村大龍寺遺跡	散布地	中世
154	応龍寺跡	寺院跡	近世
155	旭城跡	城館跡	近代
156	塔田琵琶田遺跡	集落跡	古代・中世

遺跡番号	遺跡の名称	種別	時代
157	久路土馬路遺跡	散布地	中世
158	久路土上柳遺跡	散布地	古代・中世
159	久路土慈光庵遺跡	散布地	古代・中世
160	久路土撞鐘田遺跡	散布地	中世・近世
161	久路土猿楽田遺跡	散布地	中世
162	高田城跡	城館跡	中世
163	広瀬城跡	城館跡	中世
164	高田遺跡	散布地	古代
165	石清水八幡宮	神社	中世
166	高橋家の豊後梅	天然記念物(市指定)	近世
167	旧黒土郵便局	建造物	近代
168	久路土門田遺跡	散布地	古代・中世
169	小石原泉遺跡	集落跡墓地	古代・中世
170	皆毛牛踏遺跡	散布地	中世
171	堀立千田遺跡	散布地	中世
172	堀立アモサ遺跡	散布地	中世
173	堀立上屋敷遺跡	散布地	古代・中世
174	黒土七夕遺跡	集落跡	中世
175	観音堂	仏像・祭祀	
176	上毛条里遺跡	集落跡	古代・中世
177	皆毛梶又遺跡	集落跡	古代・中世
178	久路土六田遺跡	集落跡	古代
179	久路土芝掛遺跡	生産遺跡	古代
180	黒土城跡	城館跡	中世
181	久路土高松遺跡	散布地生産遺跡	古代・中世
182	黒土駅(宇島鉄道)	鉄道	近代
183	広瀬橋駅(宇島鉄道)	鉄道	近代
184	六郎桜木遺跡	集落跡	古代
185	皆毛高屋代遺跡	散布地	中世
186	如法寺	寺院	中世
187	上大西遺跡	集落跡	古代・中世
188	永久遺跡	集落跡墓地	古代・中世
189	才尾平原遺跡	集落跡	中世
190	才尾道祖神社石塔群	石塔	中世
191	蔵春園	建造物(県指定)	近世
192	河原田善丸遺跡	集落跡	古代
193	河原田塔田遺跡	墓地	古代・中世
194	河原田四ノ坪遺跡	集落跡	古代・近代
195	薬師寺城跡	城館跡	中世
196	薬師寺塚原遺跡(A・B・C区)	城館跡	古代・中世
197	鬼木四反田遺跡	集落跡祭祀跡墓地	古代・中世
198	鬼木城跡	城館跡	中世
199	鬼木鉾立遺跡	集落跡	古代
200	鬼木溝添遺跡	集落跡	古代・中世
201	行逢宮貴船社	神社跡天然記念物	
202	久路土二又遺跡	散布地	中世
203	久路土樋掛遺跡	集落跡	古代
204	久路土下川辺遺跡	集落跡	古代
205	山谷石塔	墓地祭祀跡	中世
206	山谷石塔	墓地祭祀跡	中世
207	水神社冷水(畑の冷泉)	神社天然記念物	
208	山田(櫛狩屋)城跡	城館跡	中世
209	四ノ瀬城跡	城館跡	中世
210	四ノ瀬城下屋敷跡	屋敷跡	中世・近世
211	火の浦石塔	着塔(県指定)	中世
212	篠瀬の窟①	祭祀	
213	篠瀬の窟②	祭祀	
214	古屋敷の窟	祭祀	
215	宝寿寺裏の窟	祭祀	近世